

中通中学校区

ぼなり山と餓鬼塚

ぼなり山というのは曾地の大沢山のことである。

昔、曾地の大沢の山から山津波がぼなりながら「小田の入りの沢」を一押しになめつくした大崩れがあった時、その地鳴りがとても恐しかったので、土地の人は大沢の山をぼなり山と呼ぶようになった。さて、その山津波の復旧工事のために、村の人たちが毎日総出で「小田の入りの沢」で作業をするようになった。

その沢のそばに大きな桜の木と松の老木が茂っていて塚があった。村人たちはその木の枝に弁当を結びつけて働いていた。やがて昼食時になって、村人たちは食事をしようと弁当を開いたが弁当はからだった。度々弁当がからになっていたが弁当を盗み食いつたという犯人を見たものもなく、とうとう犯人はわからなかったで、「それは地獄の餓鬼童がひもじさのあまり食ったのだろう」と村人たちは話し合い、それ以来その塚を「餓鬼塚」というようになった。

力もち角造と重郎左エ門

曾地の重郎左エ門は立派な力士になりたいと、曾地の鎮守様に百度まいりの願をかけ、一度お参りするたびに麻一かけづつ納めて祈った。やがて満願の日百把の麻をきりきりとまいてねじきってしまった。

「神様が願い事をかなえてくださった」

と重郎左エ門が喜んで拝殿から下りて、土をふんだら何しろ百把の麻をたちきる程の力をもらったのだから足がめりめりと土の中へめり込んで抜くことが出来なくなった。

重郎左エ門は改めて神様に願をかけなおして「敵一位」の力をもらった。

ある年旅の力もちが他流試合に曾地へやって来て、これも力じまんの角造の家に泊った。

角造は馬のかいばを入れた大鍋を左手の小指にちょいとひっかけて来て右手でまきをくべた。

旅の力持が驚いて、

「ずいぶん力があるねえ」。

というと、

「なあに、おら村には重郎左エ門という力士がいる。おら力なんて重郎左エ門の足もとにも及ばないよ」と言だったので旅の力もちは驚いて早々にひきあげていったという。

曾地の薬師如来

昔、曾地の山頂が毎晩光るのを割町の庄屋さんが見つけ、花田村の庄屋さんと曾地の庄屋さんに話して三人で調査にかけた。

浄土寺山の頂上に腰掛け松と言って枝ぶりの美しい黒松の老木があった。三人がたずねあぐんでこの腰掛け松に来たところ、その枝の上に薬師如来の尊いお仏像があったので、

「薬師如来が會地においでになったにちがいない」と、そこに一堂を作っておまつりした。

×

×

昔、塗師が悪心を起してこの本尊様を盗んで逃げたところ、天罰たちどころに現われ参道に出るやいなや血へどを吐いて死んだという。

×

×

戊辰戦の時数人の兵が浄土寺を焼こうとして石段を上ってくると、読経の声がしたのでお堂に入ったとたんにお経の声がやんでしまった。だれがお経を読んでいたのかとあたりを見まわしたがり影はなくお堂の中はしんかんと静まりかえっていた。よく見ると本尊の薬師如来がとうとうと汗を流しておられたので、兵たちはびっくりして逃げ去ったという。今でも汗のあとが残っているといわれている。

願かけをきく薬師さん

會地の村から嫁にいったある婦人が嫁入り先きのおばあさんが長いこと病気で寝ていられたので會地の薬師さんに

「私の子どもの命をちちめてよいから、おばあさんの病気をなおして下さい」と願をかけた。ある日、薬師さんにお参りしたあと、実家に寄って願かけの事を母親に話すと、

「そんな無理な願をかけるものではないよ。もしそうなったらかえって気の毒になりませんか。」

とたしなめたが嫁は願かけをかえなかった。

しばらくして元気であった子どもがだんだん元気がなくなって死んでしまった。おばあさんは日増しによくなくてその後七年も長生きをしたという。

×

×

豊作さんの一人むすこ寛一郎さんは幼い時目をわずらい医者も「これは失明する」と手をあげた。

豊作さんは薬師さんが願い事かなえてくれることを知っていたので、「私の目をむすこの寛一郎の目とつかえて下さい」と願をかけた。この願が聞きとどけられて豊作さんの目はだんだん弱り遂に一眼は見えなくなり、かわりに寛一郎さんの目は立派になおったということである。

甲州婆さんが古井戸

會地峠付近に「草生津が谷」というところがある。近くの山の中には昔の手掘りの石油古井戸があちこちにある。その中に土地の人々が「甲州婆さんが古井戸」と語り伝えている古井戸がある。

明治天皇の北陸御巡幸について、馬車の通れる會地峠に開かれたということであるが、当時はなかなかの大事事であったのであろう。遠く甲州あたりの土方でもあったのであろうか、この谷の上に移り住んでいた。体格もよく、大胆さにも似合わぬやきもちやきの男が婆さんの主人であった。婆さんと言ってもこざれいな女であったが、主人のやきもちやきには一生不幸な生活を送らねばならなかった。他の男に色眼をつかったといっはなぐられ、まおとこしたといっ

ではちようちやくされ、竹やりでついたり、赤く焼けた火ばしで体をやいたりしたという。あぐくのはてこの古井戸に捨ててしまった。土地の人々が山に草刈りに行ったところ、「ウーム、ウーム」という人のうめき声が聞えてきた。古井戸の人をあけてみれば、すでに数日前の死人であった。聞えるはずのないうめき声がどうして聞えてきたものか、村人の語り継がれるのは、この不思議さも加わって、怨霊がこのあたりにさまよっていたからだということである。

おまんが井戸

曾地峠を中心に古い井戸があちこちに二十箇所ほどある。その中に「おまんが井戸」という古井戸がある。その昔長岡街道は妙法寺部落を通っていたので、この曾地峠は道も荒れて草ぼうぼうであった。

いつのころか、この曾地峠に年若くして美男子の武士が住んでいた。村の若い娘たちはこの武士に思いを寄せ、さかんに言い寄りしたが武士は妻の「おまん」ひとりを愛して平和に暮していた。ところが若い時の律義者が三十過ぎた分別盛りにかえて心の中の狂い出すことが珍しくない世の中の例にもれず、ある時ふとしたことから一人の愛人ができてしまった。愛は盲目とか、それからの武士は人が変わったように妻を憎み彼女だけを愛するようになった。溺れかけた武士はただ愛人の指図のままであった。そしてとうとう彼女にそそのかされて、妻を殺して近くの井戸に捨ててしまった。

井戸の水はおまんの悲憤と怨恨とにみたされた死体をのんでまた

元の静けさになったが、しかしその井戸に行く人々が「おまん」と呼ぶと井戸水が急に波立って騒いだという。その後武士と愛人は井戸水を汲んで風呂をわかし入ったら、だんだん体が腐り、ついに死んだという。おまんが井戸の水は今も汲む人はない。

化け物墓

菊尾の利兵衛という屋号の石口さんの家では、お盆のお墓参りを八月十三日の夕方にやらないで、八月十四日の昼間やる。

大昔、石口さんの家で、十三日の夕方お墓参りに行ったら、墓地の大きな木のかげから「ばけもの」が出てきて、びっくりしてお墓参りもしないで急いで家に帰ってきた。翌日お参りに行ったら何もなかったという。お墓には「ばけもの」はつきもののようながそれから石口さんの家では十三日の夕方はお墓参りに行かなくなっただけのことである。

吉井の御中山

吉井の大明神が池付近に御中山という所がある。

元暦のころ源義経が従者と共にここを通ると、美しい婦人が現われて行く手をさえぎった。(あるいは怪物ともいう)そのようすがおかしいので家来が叱りつけたが道に立ちふさがって一行を通さな

いので、弁慶が怒って三太刀切りつけた。すると姿はたちまち消えて、大きな板石が五枚に割れていたと一陣の風が吹いてきて二枚の石を佐渡の国へ吹き飛ばしてしまったという。今でも御中山には三枚に割られた石がある。この石に生えた苔はむし歯や眼病に効があるといわれて採りに来る人も多いという。

弁慶が切りつけた時、血しおが飛び散ってこの辺が一面赤くなったので土地の名を「赤坂」ともいう。

おかめが井戸

吉井西が峯天神社南側の田の中に清水がこんこんと流れ出ているところがある。

昔、矢田に「おかめ」という女がいて、俗にいう下ごりに、てまゝい女に出ていたが彼女の通り道にあるこの清水は、彼女の身だしなみをうつす鏡ともなり、顔を洗い、口をすすぐなど、いわば「おかめが化粧の清水」であった。それがだれ言うことなく「おかめが井戸」というようになったというのである。

また一説には、天神社の御手洗水であったので「お神の井戸」というのが本当であったが神を「かめ」と発音して「おかめが井戸」となったという。

また一説には、九郎判官義経が奥州へ下る途中、近くの赤坂という所で休憩して、水を所望したところ同行の家来亀井六郎がこの清水を発見したので「亀井が井戸」となり「おかめが井戸」となったということである。

亀井六郎という人が同行したかどうかは確かな話ではないが、明治三十年ころ赤坂に伝染病の避病院があって、これを食水に使用したという。

(注)おかめが井戸二ヶ所あり。

百足丸

中通村吉井を開創し、庄屋役となった下条弥五左エ門という人が、ある日公用で高田からの帰り道、蟹が淵（鯖石川の下流）というところで馬がつまずいた。そのために腰に差していた刀が落ちたのも知らないで帰った。家に帰って気がつき、召使いに探させたら三尺ばかりの百足（むかで）が道にはっていた。召使いは驚いて急いで帰り、主人に告げた。主人も不思議に思っ行って見ると百足ではなく、落した刀だった。主人は大喜びで持ち帰り、よく刀を見ると百足の形が現われた。それからこの刀を「百足丸」と名づけたと伝えられている。

吉井のお万が井戸

吉井と矢田の境に一つの丘があり、その上に菅原道真をまつるお宮がある。この丘はうつそうと木が生い茂って人々は天神森と呼んでいた。その森の中にお万が井戸といって小さい井戸がある。

昔、矢田のお万という娘が吉井に恋しい男をもち毎夜赤坂山を越

えて、途中この井戸水で化粧して吉井の恋しい男を訪ねた。

土地の若い衆はこれをねたみ、ある夜相談してお万を捕えてしめ殺してしまったという。今でも

「吉井天神が森 流れ出る水は 矢田のお万が化粧の水」と歌われて、お万が井戸は薄命の美女とともに人々に歌い伝えられている。

吉井滝谷部落のいわれ

吉井に滝谷という部落がある。

昔、この地を義経公が通られし時 八幡大菩薩を祭った宮に 白旗が長く下がって、ちょうど滝のように見えたので、義経公が滝谷と命名されたという。

吉井の芝峠のかやなびき

吉井から黒川に至る山道を芝峠というが、ここに生えるかやはなぜか左右になびいて倒れ丁度人が通行した後のような有様で生えている。

これは昔善根の弥三郎ばばが善根より逃げ出して弥彦山へ行く時、荒々しく通ったのかやが恐れをなして左右になびいてしまった。それから今でも当時の荒々しさに恐れて左右になびき生えるのだと土地の人は言っている。

飯寺の長者

吉井飯寺村には昔近郷第一の長者が住んでいて、今でも長者屋敷、長者の井戸がある。

この長者のせがれが年ごろになり北条城の息女と結婚することになった。さて目出度く結婚式も終ったその翌朝、飯寺峠の頂上に北条城の殿様の奥方が現われて長者屋敷の姫をよび起された。

姫の姿を見ると奥方は峠の上から軍配うちわをあおぎたてて、

「姫よ火の元には十分気をつけなさい」

とくりかえし叫ばれた。その軍配うちわは金倉山の天狗が火事よけのまじないに北条城に献上したもので、北条城の宝物となっていたものである。

それから何百年もたったが奥方が心配されている心が天に通じたのか飯寺には未だ一度も火事がないということである。

飯寺の蛇塚 蛙塚

吉井の飯寺村の田の中に蛙の形をした岩が土中より現われて、これを村人は蛙塚と言っている。その東方に長い岡が延々と続いて、あたかも蛙塚に攻まろうとする蛇の形に似ているのでこれを村人は蛇塚と呼んでいる。

昔、蛙が蛇に正に吞まれようとした時、蛙が一心に飯寺の鎮守さ

んに助けてくださいとお願いしたところ鎮守さんはこれをあわれんで蛇、蛙とも石にしてしまわれた。と村人たちは語りつぎ鎮守様の御徳をはめたたえている。

代知らずのわらにお

矢田の戸田さんという家の庭に「代知らずのわらにお」または「用心にお」という古いわらにおがあつて、不思議な存在になっている。これは松平越後守がとりつぶしになったとき、松平家の御奥役であつた戸田内膳が同家の宝物、文書類を預り、その「にお」の中に隠したものだといわれている。今戸田さんの家にある数々の宝物がそれだとも言われている。とにかく、毎年その上をわらでふき、下の方はわらか土か、わからないようになっている程である。科学的にはどうかかわからないが、その土のようになったわらは、きず薬になると言ってもらいにくる人人があるという。

小黒須の放酒の杉

小黒須の浅野さんの屋敷に、高さ十五間半、周囲目通り五尺六寸あまりの杉の太木があつて、「放酒の杉」と呼ばれている。

昔、この杉に群をなして蜂が集るので、調べて見たら、地上二間ばかりの所に孔があつて、そこから酒が流れだしていたという。今はその事がやんだが、当時放酒の杉のそばに、酒作り工場があつ

たという。

飯塚の由来

昔 義経公がこの地を通られた時 この地の景色を賞し、ここで休憩し食事をされた。

食事が終つて、その飯椀を埋められたので、里人は ここを飯塚と名づけたという。

